

8/14 福井

第10景

シニア

冷房がない6畳間。扇風機が取り壊された煙を掃りしていた。流し台には、即席ラーメンを食べた丼が置いてある。今朝の食事だ。

福井市の公営団地に住む晃さん(73)―仮名―は「企業年金が出る来月1日まで、ずっとラーメンやな」。支給日はまだ2週間以上先だが、戸棚には即席ラーメンが四つあるだけ。一つを数分割して1食分になっている。

晃さんの収入は年金のみで、1カ月約5万7千円。そこから介護保険料などを支払つため、手取りは約5万円。預貯金はゼロだ。生活保護を申請すれば、生活は少し楽になるが「絶対に嫌」と話す。

年金支給日近くなるとお金が底を突き、団地の知り合いから数千円を借りることもある。知り合いはいずれも生活保護を受けている。別の知

⑩ 責任なき貧困

人男性は「がんで来死ぬから使って」と原付きバイクをくれた。小さな飯台には、その男性の遺影が飾ってある。

中学卒業後、県内の染色会社に勤めた。20代で転職し、関東の工場で正社員として働いた。生活は安定していた。

30代後半の時、病気がちだった両親を見るため福井に戻り、電子部品関係の会社に就職した。しばらくして父はがんになり、母は認知症になった。仕事を続けられなくなった。梱包作業や盛りかこの配達などバイトを転々としながら、両親の治療費を稼いだ。



即席ラーメンを食べた丼が並ぶ晃さん(仮名)宅の流し台。収入は年金のみで、支給日近くなると知り合いからお金を借りることも7月、福井市内

疲れ果て「死んだ方が楽だ」と思った。結婚を考える余裕はなかった。

父も母も亡くなった。40歳を過ぎ、中卒では望む仕事の正社員にはなれず、バイトを続けるしかなかった。

2018年度の県内の生活保護世帯は3383で、08年度比70・9%増。高齢者世帯が全体の約6割を占める。厚生労働省の18年国民生活基礎調査によると、高齢者世帯のうち、総所得が公的年金・恩給のみは半数に上る。生活状況が「苦しい」と答えた割合は55・1%に上った。

晃さんは病気で体調が優れないのに、4カ月ほど病院に行かなかつた時期がある。知人の紹介で現在は、光陽生協

クリニック(福井市)で低所得者などを対象とした「無償・低額診療事業」を受けている。老後に20万円の蓄えが必要とした今年6月の金融審議会報告書で年金への不足が高まったが、同クリニックの田嶋清孝事務長(38)は「現実なサラリーマンだった晃さんは、両親の介護で、仕事をリタイアせざるを得なくなつた。サポートできたわけではないし、自己責任という問題ではない」と指摘する。

晃さんの6畳間にはダンス代わりの段ボールが積まれ、端にある戸棚には「キャンディーズ」「ピンクレディー」「岡田有希子」など色あせたCDが整然と並んでいる。音楽好きで、かつてはエルビス・プレスリーのファンクラブにも入っており「夕々にキーボードでも弾いてみたいね」とつぶやぐ。

かつては「どこでもいる若者の一人だった。人生を振り返ってみても間違つた判断はしていない」と思う(福井県)

年金足りず時々借金